

Title	炭坑労働者の生計
Author(s)	河田, 嗣郎
Citation	経済論叢 (1923), 16(5): 878-884
Issue Date	1923-05-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/128020
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第六十卷 第五號

大正二十五年一月一日發行

論叢

相續税の經濟政策觀

法學博士 神戸 正雄

階級に就いて

文學博士 高田 保馬

價値の類型と個性

法學士 恒 藤 恭

サン・シ
モン派の社會改造哲學及び連帶思想

文學博士 米田庄太郎

本邦自殺の男女別

法學博士 財部 靜治

時論

税法の新改正を論ず

法學博士 小川郷太郎

發明と國力

法學博士 山本美越乃

說苑

水戸烈公の穀物政策

法學士 本庄榮治郎

中世末期に於ける村落の結合を論ず

牧野信之助

雜錄

炭鑛労働者の生計

法學博士 河田 嗣郎

簡易平均法に就いて

經濟學士 岡崎 文規

雜錄

炭坑労働者の生計

河田 嗣 郎

一 我國に於ける鑛業労働者中に在つては、炭坑労働者は其數の上から見て最も重要な地位を占めて居ると謂つて差支ないであらう。從て炭坑労働者の實狀を經濟的並びに社會的諸方面から觀察することは、甚だ必要で又興味ある所とせなければならぬ。茲に掲ぐる所のものは固より全豹の一斑たるに過ぎぬが、炭坑労働者

第一表 支出費目別調

摘要		計		百分比									
三人暮らし	世帯	四人暮らし	世帯	五人暮らし	世帯	六人暮らし	世帯	七人暮らし	世帯	八人暮らし	世帯		
總支出	一世帯	總支出	一世帯	總支出	一世帯	總支出	一世帯	總支出	一世帯	總支出	一世帯	總支出	一世帯
額	平均額	額	平均額	額	平均額	額	平均額	額	平均額	額	平均額	額	平均額
六三、二二〇	六三、二二六	六九、五五七	七〇、二二〇	七五、五三八	八八、八六六	四九、〇〇〇	四九、二二〇	四〇、八八八	三八、八六〇	五八、二五〇	一九七、〇〇〇	三五五、〇〇〇	四六六、〇〇〇

の經濟實狀を窺ふ一端として、私が先頃福岡縣田川の三井鑛業所を訪れた際得た材料を其儘捨てるも惜い氣がするまゝに拾録する次第である此の生計費に關する調査は三井鑛業所では毎月作製せられて居るのだが、茲にはたゞ昨年九月に於けるものを一つだけ掲げて置く。九月を選むだといふことに何の理由もない。たゞそれが私の得た材料の中で新しいものだつたからである。

先づ大正十一年九月に於ける同所の労働者三十家族に就いて、其の生活費支出額を其の重要な項目に分類して其の實額と各費目の總支出に對する千分比とを示したものを掲ぐれば左の通りである。

すればやゝ低きに居る位であつて、それは山間の炭坑地に住ふ關係からあまり食物に奢らないのと地方一般の物價關係と今一つには又三井鑛業所には購買會の設もあり飲食物が比較的安價に得られるのに因ることであらう。試に大阪市勞働調査報告に示された所を見るに、五十圓以上七十圓以下位の月收入を有する者に在つては、食料の歩合は總支出の五割一分強になつ

[illegible]

て居る。¹⁾本誌前號所載の獨逸高等官の生計費調査に照して見るも、近時食料費歩合はやはり四割二歩内外になつて居る。

次に住宅費は僅かに五分一厘で之はたしかに都會地方の労働者の之が爲めに費す所に比して小さい。それは固より土地柄によることだが、一つには社宅が供給されて居るからである。次に薪炭燈火費が著しく少額(二分六厘)になつて居るが、之は炭坑一般に石炭が頗る安價に供給せられ燈火も會社から安價に配給さるゝに依る。

若しかゝる事情がなかつたならば燃料費は大抵總支出の五分弱位に及ぶであらう。次に被服身廻品費(一割三分一厘)は少し多額のやうである大阪市の調査では凡そ八分強位にしかなつて居らぬ。獨逸高等官生計費に表はれた所と伯仲の間に在る所から見ても、炭坑労働者は住の方面に費用が少くてすむ所から、やゝ衣の方面に金を費ふものと見てよいであらう。次に交際費の

六分八厘も決して少い方ではあるまい。最後に貯金(二分)は先づ普通で決して此種階級の労働者として我國の現状に於て少い方とは謂へぬ。

尙ほ生計費合計額に於て一世帯平均額が、家族員數の増加するに従ひ三人暮五十七圓餘、四人暮八十七圓餘、五人暮七拾五圓弱、六人暮百八圓弱、七人暮百十七圓餘、八人暮百四十一圓弱といふ風に増加して居るのは普通先づそんなものであらう。たゞ表中四人暮の八十七圓餘に對して五人暮七十五圓弱となつて居るのは、調査に用ゐられた家庭に多少異常的な事情を有するものゝ含まれて居た爲めで、主としては四人暮の方に於て被服費と醫藥費と雜費とが多過ぎたが爲めと見られる。

二 次に各世帯に於ける収入と支出との關係に就き、世帯主の収入、一家の全收入、一家の全支出、右兩種収入と支出との歩合關係等を示せば左表の通りである。

第二表 收支調

摘要	一 家人員	三 人暮	四 人暮	五 人暮	六 人暮	七 人暮	八 人暮	計
	世 帯 數	五	八	六	五	五	二	三〇
世帯主收入	總 額	二五九二	三三八三	一七九三	二九〇三	一六四一	二六〇五	一八八八
	一世帯平均	五一八	四七三	二九八	五八〇	三二八	一三〇二	二五五〇
世帯全收入	總 額	二七〇五	七〇五三	二八〇二	四四〇九	六二九八	二〇五七	二八八七
	一世帯平均	五四一	九七六	八〇〇	一三三三	一三九六	一〇三二	五九二
世帯全支出	總 額	二六〇一	六九〇三	四四〇八	四三二二	五八七〇	二八二四	二七五九
	一世帯平均	五二〇	七六八	五八八	一〇三三	一一五〇	一四九〇	五五九
平均世帯主收入對平均支出額ノ割合		一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三
平均世帯全收入對平均支出額ノ割合		一〇四	〇九六	〇九三	〇九二	〇九二	一〇三	〇九一

備考 平均世帯主收入及び平均世帯全收入ニ對スル平均支出額ノ割合ハ收入一ニ對スル支出ノ割合ヲ示ス

此の第二表に就いて見るに、最も著明に眼につくことは、世帯に於ける主人收入が割合に少く世帯主以外の者の收入が前者の二倍以上甚しきは四倍にも及ぶものあることである。即ち三人暮世帯に在つては世帯主の收入四十一圓餘で世帯主以外の者の收入十二圓、四人暮に於て四十四圓對五十二圓、五人暮に於て三十二圓對四十七圓、六人暮に於て七十三圓對六十一圓、

七人暮に於て三十九圓對八十三圓、八人暮に於ては二十四圓對七十八圓といふ有様である。此の事情は炭坑労働に在つては一家の主人と共に妻も雇傭労働に従事し息子や娘も亦共に働き、労働が餘り熟練を要せざる力仕事たるが爲めに、苟も労働能力ある者は皆出でて稼ぐことが出来、事實そんなのが多いから然るものたるに外ならぬ。

そこで表中世帯主の平均収入に對する平均支出額の割合及び世帯全収入平均に對する平均支出額の割合に就いて見るに、世帯主の収入だけでは支出の總額を支辨するに足らず、一家員數の多きも少きも即ち何人暮の世帯に於ても支出は収入以上に及び少きも四割方多きは五十割近くも後者は前者に超過する有様にある。然るに之を一家の全収入と支出額との割合に於て見れば、支出が収入以上に大なるものは僅かに三人暮の所と八人暮の所とだけであつて、然かも其差は一割足らずと四割足らずとに過ぎず、其他四人暮以上七人暮までの所に於ては支出額は収入額よりも少く、凡そ収入額の五分から一割位は収入が支出に超過する有様にある。三人暮で収入の支出に足らないのは働手が少い爲めであ

第三表 收支過不足調

摘 要	
一家人員	世帯數
三人暮	五
四人暮	八
五人暮	六
六人暮	四
七人暮	五
八人暮	二
計	三〇

り、八人暮で収入の足らないのはまだ幼少の子供でも多いといつたやうなことで、働手に對して食手の多い爲めと見る外はないが、ともかく四人暮以上七人暮以下の世帯に於てたとへ僅かなりとも収入が支出に超過するは、稼ぐに追付く貧乏なしといふ事實を雄辯に物語るものとせなければならぬ。

然し右は三十世帯を平均して見た所に表はれたる事實だから、之を以て直ちに實狀然る有様を現實に示すものと爲すことは出來ぬ。實狀としてはかゝる平均をせないで、収入と支出との過不足を一定金額標準に於て示す所の世帯數を實數のまゝに見る必要がある。その表として作られたるものは左の通りである。

世帯主收入 ヲ以テ支出 額ヲ支辨シ テ						世帯主收入 ヲ以テ支出 額ヲ支辨シ テ					
不足ノモ			餘剩アルモ			不足ノモ			餘剩アルモ		
計	十圓未満	十圓以上	計	十圓未満	十圓以上	計	十圓未満	十圓以上	計	十圓未満	十圓以上
三	二	一	三	二	一	五	一	四	一	一	一
三	一	三	五	二	二	八	二	六	一	一	一
四	二	三	二	一	二	六	一	六	一	一	一
一	一	一	四	二	二	四	一	四	一	一	一
二	一	二	三	一	二	四	一	四	一	一	一
三	一	三	一	一	一	二	一	三	一	一	一
一	一	一	一	一	一	二	一	二	一	一	一

第三表の示す所によると、世帯主の収入だけでは一家の支出に不足を告ぐるのが大多數で、三十世帯中二十九世帯はそうである。然かも就中二十六世帯に於ては月額十圓以上の不足を示して居る。然るに世帯全収入と支出額との比較に於て表はるゝ所では、収入の不足せる世帯は

十四世帯で、然かも十圓以下の不足を示すもの四世帯に過ぎないで、他の十世帯は十圓以上の不足を示して居る。所が他の十六世帯に在つては収入は支出に超過し七世帯に於ては其の超過額十圓未満だが、九世帯に於ては十圓以上となつて居る。此の實狀に照して考へられることは、

一家の全收入を以てして尙ほ支出に不足するもの、數の比較的が多く、然かもその大多數は十圓以上の不足のものであり、その不足を示すものが六人暮の世帶を除く外何れの大さの世帶にも二三世帶づゝあり、ともかく不足を示す世帶十四の多きに居り、調査世帶總數三十に對して總て其の半數たること之である。之ではあまり稼ぐに迫付く貧乏なしとも謂へぬ次第で、人をして、炭坑勞働者の生計の實狀の收支計算上あまり良好ならざる狀態にあるを思はしむるに足るものがある。惟ふに多數勞働者の家計に於ける貯金の不可能、引いて勞働者に對する一般的社會保險の必要、其の保險の構成上に於ける雇主と國庫との保險費用に對する負擔の必要等のことは、此の一端の實狀に照しても考へ得らるであらう。